

Voice



扉はどんな人にも開かれている

採用面接では、自己PRや途上国に対する思いだけでなく、自分には専門性や経験が足りないこと、力が全然及ばないことをありのままに伝えました。格好が悪くても、悔しくても、今の自分を正直に見つめ、真摯に自己分析することは大切だと思います。「幼少の頃にテレビで見た途上国で働きたい」と夢を持ち続け、大学の専攻も証券会社での経験もいずれ役に立つだろうと考えていた一方で、なかなか確信を持ってない日々。「それならば」と、社会人3年目から国際協力業界への挑戦を始めました。入り口の扉は誰にでも開かれているので、勇気を持って早めに第一歩を踏み出すことが重要だと思います。今の目標は、途上国で通用するマーケティングの専門家になること。自分に力がなければ、誰も幸せにすることはできません。これまで途上国で出会った人々を思い浮かべながら頑張っていきます。

吉谷 真子さん
事業部スタッフ

株式会社 JIN

設立：2011年
資本金：1,500万円
従業員：18人(2020年4月現在)
本社：埼玉県さいたま市
事業分野：農業・農村開発、自然環境保全、保健衛生、栄養改善、平和構築、スポーツと開発、社会配慮、ジェンダー、人材育成、評価分析、中小企業支援など
募集職種：開発コンサルタント(通年)、若手スタッフ(不定期)
募集人数：若干名
住所：〒330-0844 埼玉県さいたま市大宮区下町2-18 TS-3 BLDG.2階
Tel：048-650-0400
Mail：jin_saiyo@jincorp.jp (応募専用。質問はHPの「お問合せフォーム」で受け付け)
HP：http://www.jincorp.jp



“100年続く会社”を目指し、いろいろなことに挑戦していきます

JINに入社

証券会社に勤務

千葉大学法経学部
総合政策学科卒業
(インドネシアへの交換
留学を半年間経験)

Work

現地をもっと知りたいと工夫

「現地を知るには、住民のなかに飛び込むこと」。ナイジェリアの農村部での栄養改善プロジェクトで先輩からいただいた言葉です。ジェンダー分野を担当していますが、危険地域で行動が制限され、また、調査日数にも限りがあり、どうしても機での作業が多くなり、住民の方々に対する理解について不安を感じていた時でした。そこで、会社に支援してもらい、調査以外で現地家庭を訪問しました。家庭のお母さんに温かく迎えてもらえ、何気ない会話をし、現地の生活を肌で感じることで見えてきたものがあり、自分の心掛けや行動次第で調査に深みが増すことを実感しました。

現在、住民向けの研修を準備中ですが、コロナ禍で渡航ができません。しかし、その時の経験をもとに、自分の担当分野以外の会議にも参加したり、遠隔であってももしっかりコミュニケーションを取ったりしながら、住民に寄り添った研修内容になるように努力しています。



住民向け研修の内容や方法について政府職員とも協議を重ねます

人を大切に 開発コンサルタント

「途上国の皆さんの考えや文化を尊重し、途上国の人々を中心に考える。そして社員一人一人が幸せになれるよう社員のことを真剣に考える。そんな『人』を大切にすることを社をつくりたいと常に考えてきた」と話すのは、2020年に設立10年目を迎えたJINの代表取締役大野康雄氏。

創設以来少人数ながらも、さまざまなプロジェクトを展開しており、複数の援助機関が関わる難易度の高い案件でも存在感を示してきた。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大ですべての渡航が禁止され、事業計画の変更が強いられるが、現地スタッフの安全確保と、関係者とのコミュニケーションを最優先にしている。「我々はこういう準備をしている、状況が良くなったらこうしたい」と現場に合わせた具体的な呼び掛けを続けている。今はそ

共に国際協力の 質を高めたい

それぞれのプロジェクトで、希望の懸け橋を架けていくことが、我々の大きな役目になっている」と大野代表は語る。

成功事例や類似案件をもとにアプローチをした方が効率的な場合でも、まず現場に出て住民の生活に寄り添うことを優先する。人々と同じ目線になることで課題解決の糸口が見つかる経験を何度も重ねてきたからだ。

コンサルタントは知識や技術だけではなく、人としての振る舞い方も重要になるので、社員育成を真摯に行っている。先行きが見えない現在も、ポストコロナ社会を一人一人が“自分ごと”として創造的に考えて実践できる機会を積極的に設けている。

大野代表は「自分自身の能力を高めるだけでなく、国際協力全体の質を高めたという気概と大局観を持つ方と一緒に働きたい」と言う。